

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 25 日現在

機関番号： 54502

研究種目： 基盤研究 (C)

研究期間： 2008 ~ 2011

課題番号： 20520405

研究課題名 (和文)

日本手話のコーパスによる類辞構文研究

研究課題名 (英文)

A study of CL constructions in JSL corpus data

研究代表者

今里 典子 (IMAZATO NORIKO)

神戸市立工業高等専門学校・一般科・准教授

研究者番号： 90259903

研究分野： 言語学 (日本手話)

科研費の分科・細目： 3001

キーワード： 日本手話, 移動構文, 類辞, 連続動詞構文, コーパス, 文法化

1. 研究計画の概要

2段階の目標を設定した。

(1) まず日本手話 (以下, JSL) の実証的研究を進めるため, 単純な語彙リストではなく, メタデータまで完備した, 文レベルのコーパスを作成する事である。特に類辞 (CL) を含む構文 (移動構文) を中心に作成する。

(2) (1) を作成する為に集めたデータを利用した実証的構文研究が第2段階の目標である。日本手話 (JSL) では, 動詞の主語や目的語にあたる手形 (CL) 等が動詞に包含されることがあるが, 多くは移動構文内の経路動詞にあらわれる。この CL が典型的にあらわれる経路動詞と, 様態動詞との組み合わせによる連続動詞移動構文 (様態動詞 V1+経路動詞 V2) 内で, 選択される動詞の種類, CL の種類やあらわれ方を精査した。またこの移動構文から発展した別の関連構文においても, 基本的な移動構文と同様の構造, ルール, 傾向が引き継がれるのか, またどのような過程を経て発展しているのかを考察する。またこれらの知見を, 音声言語における連続動詞構文等の研究結果と比較し, 音声言語も含めた一般言語学に資する理論化を目指した。

2. 研究の進捗状況

概要の目標毎に成果を記述する。

(1) 本研究ではまず JSL を第1言語とするサイナーによる, 自然な語りや会話, 日本語の JSL 翻訳, ビデオ映像の JSL 記述等, 複数の方法で映像データを撮影し, 整理し, データベースを作成した。

(2) (1) で収集したデータ分析の結果, 以下の事が明らかになった。

① JSL の移動構文は様態動詞 V1+経路動詞 V2 の組み合わせで表現され, V1 に否定辞やアスペクト等の要素は付かず, 間に別の語や「間」が入らない連続動詞 (SVC) 形式をとる場合が頻繁に観察される。その時主にいわゆる Entity CL が V2 にあらわれる。V2 が「行く」の場合, 1) 様態, 2) 付随, 3) 目的, 4) 勧誘, 5) 命令のタイプが区別され, V1 では, タイプ毎に, 様態では様態移動動詞のみ, 付随・目的では行動動詞のみ, 勧誘・命令では両方の動詞が現れるという区別があり, V2 では音韻, 形態, ゴールへの一致などに関して段階的区別があり, 1) から 5) へと文法化のプロセスを踏んでいる。

② この文法化の傾向は, Shibatani(2007)で, 音声言語に対して提案された, 文法化を容易にさせる環境条件に一致するので, 手話特有の現象でなく, 音声言語にも普遍的な傾向である。

③ V2 が「来る」の時のみ, V1 の意味 (移動 V か変化 V か瞬間 V か) に従って, 構文全体が「状況の変化」, 「未来に起こる変化」, 「未来 (の予測)」を表す要素となりうる。「来る」から未来表現が生まれる過程は, 言語全般に見られる文法化のプロセスを踏んでおり, 日本手話独特の文法化ではない。Bybee(1994) は「未来」の時制を表す表現は文法化の過程で必ず「意図」の意味を表す過程を経ると主張しているが, 日本手話においてこのような過程は見られず, Bybee の主張の反例となる。

④ 様態動詞一つだけで (経路動詞 V2 がなく SVC 形式を取らずとも), 「(終点への) 視線 (及び体の向き)」があれば, 移動表現が成立する。

3. 現在までの達成度

②概ね順調に進展している。

(1) データ収集については、データのタイプ(翻訳か、映像記述か等)についても、量についても、当初の目標以上にすすんでいることから、映像の処理には予定より少々時間がかかっている状態である。

(2) 分析については概ね計画通りにすすんでいる。

4. 今後の研究の推進方策

(1) データ収集が当初の目標以上にすすんでおり、撮影できた映像の量が多い事から、当初想定した以上の時間がその処理にかかっているため、機械的に処理できる部分については補助員等に依頼して効率化をすすめて行くことを考える。また撮影の方法についても、映像記述の場合、手元で操作した映像をそのままコンサルタントにも同時に見てもらいながら JSL 表現をしてもらい、それをそのまま撮影できるように、撮影システムを整える等、効率的で正確なデータ映像の撮影をすすめるように工夫する。

(2) 今後も計画通りにすすめて行く。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- ① 今里典子, 「日本手話の連続動詞構文」, 神戸市立工業高等専門学校研究紀要, (査読有), No47, 2009, 137-142

[学会発表] (計 2 件)

- ① Imazato, Noriko, “Grammaticalization of GO/COME in Japanese Sign Language”, Special Lecture at UT Austin, April 1st 2010, University of Texas at Austin
- ② Imazato, Noriko “Serial Verb Constructions in JSL: ‘go’ & ‘come’”, Colloquium at the Department of Linguistics, Rice University, March 11th 2010, Rice University

[図書] (計 1 件)

- ① 今里典子 (他 29 名), くろしお出版, 「ことばの対照」, 2009, 361 頁, (担当: 15-26 頁)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]